北方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策の検討に関する有識者会議（第３回）
議事録

１．日時：令和８年７月 17 日（金）15：00～17：30
２．場所：中標津町総合福祉センター　プラット　会議室（オンライン開催併用）
３．出席者：
（構成員）

	楓　千里	オフィスかえで代表
		國學院大學名誉教授
		元・株式会社ＪＴＢパブリッシング取締役
	佐々木　亨	北海道大学名誉教授・北海道大学総合博物館資料部研究員
		合同会社エ・バリュー共同代表
		小樽市総合博物館館長
	本間　由佳	明星大学デザイン学部准教授
		ＮＰＯ法人東京学芸大こども未来研究所学術フェロー
座長	矢ケ崎　紀子	東京女子大学現代教養学部経済経営学科教授
		国土審議会北海道開発分科会特別委員

（オブザーバー）
北海道総務部北方領土対策本部
根室市
別海町
中標津町
標津町
羅臼町
外務省欧州局ロシア課
国土交通省北海道局参事官
独立行政法人北方領土問題対策協会
公益社団法人北方領土復帰期成同盟
（内閣府）

三浦　健太郎	内閣府北方対策本部審議官
小林　明生	内閣府北方対策本部参事官

４．議題：

開会

ヒアリング

長野　博樹氏

（(公社）北海道観光機構事業本部デスティネーション戦略部　教育旅行・ＭＩＣＥ担当部長）

佐々木　亮介氏

（知床ねむろ観光連盟　事務局長）

清野　和之氏

（(一社）南知床標津町観光協会　事務局長）

篠永　けい子氏

（中標津町経済振興課観光振興係　係長）

羅臼町

根室市

閉会

５．配布資料：

資料１　長野博樹氏説明資料

資料２　佐々木亮介氏説明資料

資料３　清野和之氏説明資料

資料４－１　篠永けい子氏説明資料

資料４－２　篠永けい子氏説明資料

資料４－３　篠永けい子氏説明資料

資料５－１　羅臼町説明資料

資料５－２　羅臼町説明資料

資料５－３　羅臼町説明資料

資料５－４　羅臼町説明資料

資料６－１　根室市説明資料

資料６－２　根室市説明資料

資料６－３　根室市説明資料

参考資料１　北方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策の検討に関する有識者会議（令和８年度第２回目）現地視察報告

参考資料２　標津町ワークショップチラシ

６．議事録

○矢ケ崎座長　それでは、北方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策の検討に関する有識者会議、令和８年度第３回会合をこれから開催いたします。

構成員の先生方及びオブザーバーの皆様におかれましては、お忙しい中、本有識者会議に御出席をいただき、誠にありがとうございます。

本日の会議は、中標津町にあります総合福祉センター「プラット」の会議室で開催いたします。

本日は、北方領土隣接地域における学識や知見をお持ちの６名の方々からお話を伺ってまいります。

最初に、公益社団法人北海道観光機構事業本部デスティネーション戦略部 教育旅行・ＭＩＣＥ担当部長の長野博樹さん、そして、知床ねむろ観光連盟事務局長の佐々木亮介さん、次に、一般社団法人南知床標津町観光協会事務局長の清野和之さん、次は中標津町経済振興課観光振興係係長の篠永けい子さん、そして、羅臼町企画財政課課長の遠嶋伸宏さん、そして、根室市北方領土国際交流部北方領土対策課長の松崎誉さん、この６人の方々からそれぞれお話をいただき、質疑応答ということにさせていただきます。閉会は 17 時 30 分を目標にしております。

なお、北海道観光機構の長野部長におかれましては、お話を伺った後に別の御用事がおありということでありますので、お話を終わられました後に、直ちに皆様方からの質疑応答という時間を設けさせていただきたいと存じますので、よろしくお願いします。

それでは、早速お話を伺ってまいりたいと思います。

最初に、公益社団法人北海道観光機構事業本部デスティネーション戦略部 教育旅行・ＭＩＣＥ担当部長の長野博樹さんです。どうぞ 10 分ほどのお時間で恐縮でございますが、お話をよろしくお願いいたします。

○長野博樹氏　皆さん、こんにちは。このたびはこのような機会をいただきまして、誠にありがとうございます。また、恐縮でございますが、オンラインということと、時間になったら退出をさせていただくということで、申し訳ございません。昨年に引き続き参加させていただきまして、北海道、特に道東の観光の現状について、私から御案内をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、昨年、人流データを用いました、観光客の動きの事業を実施した経緯の内容につきまして、特に道東に絞った形で、どういった人流、特徴が出たのかということを御案内させていただきたいと思います。

まずは北海道全体につきましてざっと触れさせていただきますが、北海道に来られる観光客の中で、道外客に限ってお伝えいたしますと、第１の目的は「自然と風景」、そして、次に「食べ物がおいしい」などが選定される理由として非常に大きくなっています。

そのほかにも、北海道ならではの「温泉が楽しめる」ですとか、「行きたい観光地、イベントがあった」、また「家族、友人等に会う」などもございますが、「のんびり過ごせる」というものも 16.2%あるというような状況でございました。やはり景観と食を軸とした魅力の発信が北海道にとって効果的であるということが改めて分かるデータになっております。

続きまして、インバウンドのお客様につきましては、北海道の「自然と風景」、これに圧倒的に魅力を感じて北海道に来ているという状況でございます。何となく想像はついていたとは思うのですが、それに加えて、「食べ物がおいしい」、「のんびり過ごせる」ですとか、こういった理由が上位に入ってきているということで、インバウンドのお客様もそういうイメージになっているということがお分かりいただけるかと思います。

続きまして、北海道に来てどのような移動手段を使っているかというのを人流データで見ていきますと、道外のお客様について、レンタカーと鉄道の利用が多いということが分かります。現在は鉄道を抜いて、レンタカーで北海道内を回られるというお客様が非常に多くなっているという状況が見えるかと思います。そのほかには路線バスを使うというようなこともございます。キャパシティーの問題もありますので、飛行機はそれほど多くないという状況です。

引き続きまして、インバウンドのお客さんが道内でどういう移動手段を使っているかという

ことになりますと、圧倒的に鉄道の利用が多いということになります。海外のお客様につきましては鉄道が使いやすい、そして分かりやすいという、そういった結果が見えていると思います。北海道は鉄道のない地域もたくさんありますので、路線バスを使っているというのも目立っているかなと思います。

つまり、今ＪＲの様々な廃止の問題等が北海道の課題として挙げられておりますけれども、鉄道を廃止してしまうと、観光客の回る場所も変わってくる可能性があるということが見えるかと思います。

それでは、続きまして道東地区を３ブロックに分けまして、オホーツク地区、根室地区、そして釧路地区の来訪地分析ということで、どこを来訪地としてお客さんが来ているかというところを見ていきたいと思います。

まずはオホーツクエリアを見ていただきますと、北見市が 137 万人ということで最多になっております。北見市の特徴といたしましては、ビジネスのお客様が多いという背景が見えてまいります。網走に来られるお客さんも非常に多いということが見えるのですけれども、網走のお客様はビジネスも多いですが、観光のお客様も多いという状況が見えてまいります。

来訪地ランキングといたしましては、北見市が一番多く、次に大空町となっていますが、これは女満別空港も対象に入っておりますので、空港利用のお客様が大空町に来ていることが多いです。そして網走市、これは冬の観光もありますけれども、夏のシーズンの観光も含めて３番目に来ているという状況でございます。来訪地ランキングで見ますと、北見・網走地区の特徴といたしましては、道の駅や歓楽街に出向かれているお客さんの数が多いというような状況が見えてまいります。

続きまして、オホーツクエリアに、道内・道外の方がどこから来ているのかというのは状況が見えてまいりました。まずは、当然ながら道内に住んでいる方がオホーツクエリアに観光に行く、ビジネスで行くというのが最も多く、66％がそういう状況です。中でも札幌市から行く方が 13.9％ということで、こちらも結構多いかと思います。

道外で見ますと、関東から来るお客さんが多いというのが見えてまいります。神奈川県、東京都、埼玉県ということで、道外からの上位３位はこのように関東からお客さんがオホーツクエリアに来ている方が多いというのが見えてまいります。

続きまして、根室エリアにつきましては、一番多く来ているのは根室市だということが見えてまいります。その次、中標津町、別海町、羅臼町、標津町ということになります。中標津町につきましては空港の利用が多いということになってまいります。来訪地ランキング、見ていただきますと、おいでいただくお客様の多くが飛行機で来ているのが見えてまいりますが、根室中標津空港が一番来訪者としては多いというところです。その次に道の駅知床・らうす、そして道の駅スワン 44 ねむろ、そして野付半島ネイチャーセンター等という形になっております。根室にございます北方館につきましては、その次にランクしておりますので、かなりのお客さんが北方館の方にも来ているというのが見えてまいります。

続きましては、お客様がどこから来ているかというところでございます。道内で言いますと、釧路市から来ていたり、根室市など、地元の方が多いというのが見えるのですけども、札幌市の方が結構多く根室エリアに行っているのが見えてまいります。道外で言いますと、神奈川県、東京都、埼玉県、先ほどと一緒なんですけれども、関東からのお客さんが多いということが見えてまいります。その次に大阪府、愛知県となっておりますので、関西、中部からもそれなりに来てはいるということになりますが、課題といたしましては、飛行機の路線の問題等もありますけれども、関西、中部からはまだまだポテンシャルはあるのではないかと思います。

最後になりますが、釧路エリアにつきましては、釧路市が圧倒的に多いということが見えてまいります。来訪地ランキングで言いますと、釧路空港、釧路駅、ここが多いところです。そして、次に来るのが道の駅厚岸グルメパーク、そして道の駅摩周温泉、道の駅阿寒丹頂の里ということで、こういったところが多くなっている背景には、レンタカーで回っている可能性が非常に高いだろうと思います。

釧路エリアも同じような状況になっておりますが、釧路地区としての特徴は、北海道在住者が

約 56%ということで、ほかの地域より道内の方が行っている割合が少し低いということになります。むしろ道外から来ている方が多いのが見えてまいります。やはり関東地区ということになります。神奈川県、東京都、埼玉県、千葉県ということで、道外の上位４位は関東から来ているお客様が多く、これは飛行機の便の多さということが如実に出ているということになろうかと思います。

発地ランキングといたしましては、地元の方、そしてお隣の帯広市、そしてオホーツクエリアの北見市というような形で、そういうところから来ている方が多いということが見えてまいります。

根室地域における観光の現状と課題ということで、これは違うデータを用いた現状と課題が見えてきたというところでお話を昨年もさせていただきましたが、ほぼ今年も同じような状況になっているということになります。

根室地域におきましては、一人旅や少人数旅行が主流になっているということです。それから、人気の地域としては知床・らうす、根室、野付半島。野付・別海・中標津は若年層女性や男性訪問者が多いという特徴があります。それから北方館の来訪者が第６位にランクをしています。

訪問理由に、「その他」という項目がアンケートの中にはあるのですけれども、これは先ほどの人流データとは違う調査でございますが、そこに多くの方が記入をされているところを見ますと、潜在的な北方領土への関心につながっているのではないかという想定がされます。

観光の課題といたしましては、もちろん北方領土を見ていただくというのは非常に大きなポイントになりますけれども、見るだけではやはり観光としてはまだまだで、もっと体験ができたら、さらに根室地域にお客さんが来る可能性が高まると思います。そして、若年層やインバウンド層への訴求力をさらに高める、もっと魅力を海外にアピールするということも必要になると思います。

今後の展望といたしましては、北方領土について知りたい方はたくさんいるというのが何となく見えてきていますので、さらに物語性や体験型コンテンツを再構築していくことができれば、よりいいと思います。ほかには、全く視点を変えまして、アニメや映画、文学など、メディアを活用した観光誘導などもできると、より根室地域が注目されていくのではないかというように分析をしております。

簡単ではございますけれども、私からの発表は以上とさせていただきます。

○矢ケ崎座長　長野部長、ありがとうございました。データに基づいたお話をしていただきました。それでは、ここからは今ほどの御説明に対して質問やコメントをお願いします。

○楓構成員　楓でございます。長野さん、お忙しいなかありがとうございます。何点か伺います。

機構にて、様々なデータを収集して、このような統計・分析をされたと思います。私自身、この地域に伺い、詳細な観光に関するデータが取れていないと感じています。DX を推進する上で、北方領土隣接地域でのデータ収集に関して取組むべきことを教えてください。

２点目は、北方館にある程度の来館者はありますが、他の啓発施設は、お客様に存在そのものも知られていないのが現状です。他の啓発施設にお客様を誘客するためのアイデアは何かありますでしょうか。

最後に、北海道は空港一体運営ということで、それぞれの空港同士の連携を進めていらっしゃると伺っています。この地域の女満別、中標津、釧路の空港連携の中で、更に人流を増やしていくための具体的な施策があるようでしたら教えてください。

○長野博樹氏　ありがとうございます。まず１点目の御質問につきまして、観光でいいますと、もう少し突っ込んで見ていきたいと私たちが思っているのは、インバウンドのお客様の人流をもう少し細かく取りたいというところでございます。根室地区につきましては、まだまだ海外の方に良さを分かっていただけていないと感じています。プロモーションも必要でしょうし、北方領土問題も含めまして、特に欧米の方たちは文化的な意識も非常に高かったり、国際関係につい

ての興味を非常に持っている方も多いと思われます。まして根室地区ですと、バードウオッチャーも含めて、欧米の方が比較的ほかの地域よりは、割合としては多く来ていらっしゃるということですので、そういうところに訴求をしなければいけないと感じております。

ほかには、学生について、私も修学旅行や教育旅行の誘致を担当させていただいておりますが、教育旅行をもっと増やしていくことが必要だと感じております。そういったところも含めて、さらに私どもの人流データも含めまして、様々な調査をした上で課題を抽出しまして、ターゲットをどのようにしていくのかをもう少し深掘りをしなければいけないと思っております。

続きまして、北方館にについて、御指摘のように、なかなかほかの施設のことを知らない、知ってもらえていないというのがあると思います。もちろん、北方領土を見に来ていただきたいという我々の思いもありますけれども、北方領土を見に来たいと思わないで、別の目的で来ているお客様にも、どのようにこれを知っていただくのか、これを発信していくのかということが必要と感じております。「こんな施設が実はあったんだ」と後から知るようなケースもかなり多くあるのではないかと想定していますので、情報の発信を強めていくということが必要かと思います。

ウクライナの問題等もありまして、ロシアに対する考えや思いも多くの方が持っていらっしゃって、北方領土についての関心も高まっていることは間違いはないかと思います。北方領土について、様々な情報を学べる施設がたくさんあるということをもっと知らせるには、情報発信を強化しなければならないと感じております。

それから３空港につきまして、北海道エアポートさんが担当されている空港が女満別と釧路ですが、空港と一体連携というような形で、今、北海道エアポートさんと私ども、そして北海道庁さんも含めまして、一体となった回遊する周遊スタイルで回っていただく方策がないかどうかなどのいろいろな事業展開をこれから始めようと思っております。

実は先般、事業としましても、空港の活用について、より深く、細かく調査を行い、分析をしています。どのような形でもっと道東への訴求を高めていくかというところは、私どもとしては始まったばかりですので、空港連携につきましてはこれからということになると思っています。

○楓構成員　ありがとうございます。

○矢ケ崎座長　丁寧な回答をいただきまして、ありがとうございました。ほかの先生方、いかがですか。どうぞ、佐々木先生。

○佐々木構成員　佐々木と申します。丁寧な御説明ありがとうございました。

１ページ目、２ページ目のところで、観光旅行地選択理由が道外客とインバウンドでありましたけれども、この方々は情報を何で手に入れているかについての統計的なデータやその変遷はお分かりになりますでしょうか。

○長野博樹氏　ありがとうございます。私どもはある程度どこで情報を得ているのかということを調べております。年代によっても当然変わってくるのですけれども、今、圧倒的に多いのはＳＮＳになります。特にインバウンドのお客様はＳＮＳで情報を得るというのが非常に多いということになっています。

その次にはメディアです。雑誌も含めまして、まだまだ紙媒体で情報を得られている方も多いです。特に御年齢層の高い方はそういうところで情報を得ている方が多いということになります。根室地区に限らず、若年層も取り入れていくということを念頭に置いていきますと、ＳＮＳの活用が非常に大事だというように我々も分析をしており、そこに訴求をしていく、これからもっと深く入っていく必要性があると感じております。

○矢ケ崎座長　どうもありがとうございます。本間先生、お願いします。

○本間構成員　本間と申します。お忙しいところありがとうございます。
　御説明いただいた中の最後のページで、訪問理由の「その他」に、北方領土への関心がうかがえるようなところがあるということですが、この辺りの自由記述でどんな傾向のお話が出ているのかをお伺いできればなと思います。
　あとは今後の展望で、アニメ・映画などいろいろなメディアを活用してというお話がありましたが、何か今、北海道観光機構さんのほうで、参考にしているような事例があれば、お教えいただければと思います。

○長野博樹氏　ありがとうございます。まず、アンケートの「その他」の部分について、その中には、最初の目的が、「北方領土を見たい」という目的ではないお客様が、「その他」に記述されるケースが多く見受けられました。例えば温泉や食事をメインにして来られるお客様が、実際に根室地区に来てみると、北方領土はこんなに近く見えるとか、北方領土の近隣の市町村に行くと、こんなに北方領土に関わる施設がある等を初めて知るというケースも多くあったというようなことも聞いております。
　訪問理由、旅に来る前に、「その他」という部分で書かれているお客様につきましては、恐らく第１目標が北方領土ではないお客様、第２目的、第３目的に北方領土が入っているお客さんが、「その他」の部分に記述しているケースが多いかと思います。もちろん北方領土を見に来たというお客さんもたくさんいると思いますけれども、それ以外のお客さんも、北方領土に対して、実際に来てみて興味が湧くというケースも見受けられております。いかに、御自身の第１目標に加えて北方領土もある、だからこそここに来る価値がある、という価値観をどのような形で広めていくかが、今後我々の課題としてあると感じております。
　メディアの活用につきましては、今、若い世代の皆さんにつきましては、漫画に非常に多く影響を受けています。昨年度につきましては、これは函館市の例ですけれども、「名探偵コナン」の題材の地になったということで、函館市さんにお伺いしましたら、実は広告費は一円も出していませんというお話でした。「名探偵コナン」の漫画をつくられている会社さんが、函館を舞台にしたいという思いでなされて、そこに函館市は恩恵を受けたということになります。例えば漫画を企画する会社さんですとか、漫画以外でも様々な企画をする会社さんに気づいてもらえたり、売り込んだりをいかにできるか、していけるかというのが一つあると思います。当然お金のかかるケースもあります。函館市さんは偶然もありましたが、そういうところに入っていくことも一つの考えかと思います。また、例えば自然や北方領土を題材にした舞台や漫画に少しでも取り上げていただければ、注目度がまた変わっていくと思っております。そういう機会を逃さず、ましてそういったコンテンツの磨き上げも同時にしていく、そして、企業さん等に良さを気づいていただくことが必要になってくるかと考えております。

○本間構成員　ありがとうございます。

○矢ケ崎座長　本当にいろいろな視点から丁寧な御説明をいただきまして、ありがとうございます。特に北方領土隣接地域を目指していただくための情報発信と、その一方で、北海道にほかの目的で来た方に対して、この北方領土隣接地域の良さに関する情報発信の２面で攻めていくということが大事だということがよく分かりました。
　この北方領土隣接地域をこれから盛り上げていくということで、こちらも検討を進めておりますので、北海道観光機構さんも、ぜひ御一緒に盛り上げに御協力をいただけると大変ありがたく存じます。今日は本当にありがとうございました。

○長野博樹氏　ありがとうございました。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

○矢ケ崎座長　こちらこそよろしくお願いいたします。それでは御退席ください。ありがとうございました。

では、続いて知床ねむろ観光連盟事務局長の佐々木亮介さん、よろしくお願いいたします。

○佐々木亮介氏　知床ねむろ観光連盟の佐々木と申します。私のほうからは、前段に組織の知床ねむろ観光連盟の説明をした後に、後段で、取り組んできた特徴的な事業と、それが北方領土の啓発等に関わりを強められそうな部分について話をさせていただこうと思います。

始めのページは、欧米インバウンド向けに展開をしているアドベンチャートラベルですとか、高付加価値旅行に関するものの資料になります。根室管内全体を担当しているのですが、大きく２つに分けて大体、野生動物、ワイルドライフというところと、あとは産業歴史の開拓の部分、その２本立てで欧米の方には訴求をしてきているところです。参考として記載をしております。

次のページをお願いします。これも今、長野部長のほうから数字の話はあったので、参考程度ですが、根室管内に関しても、ここ数年、徐々に入込ですとか、増減はあれど、宿泊、欧米の入込も含めて増えてきているというような状態にございます。海外インバウンドの入込は、数字だけでいけば台湾や中国が多いのですが、割合としては欧米・豪が多い状態で、近年も徐々にその割合が増えてきているということになっております。

続いて、知床ねむろ観光連盟の沿革ですが、根室管内全体広域を取り扱う根室観光連盟としては昭和の時代からあったものになります。旧根室支庁、現根室振興局、根室市、標津町、中標津町の観光協会が事務局を兼任しながらやってきたところを、令和元年度に議論を経て、令和２年度から独立をして、専属の職員を雇用しまして、現在６年ほどが経ったところになります。

ただ、令和２年度は最初からコロナだったので、従来の事業がなかなか手をつけられないタイミングであったこと、また、北海道の中でアドベンチャートラベルのサミットを、という動きがあったので、そこに注力をする形で欧米・豪に向けたコンセプト型のツアーを企画するというところをしっかりやってきて、令和５年度のサミットを経て、令和６年度、７年度と徐々に、しっかりと欧米と一部アジアのラグジュアリー層、シンガポールだとか台湾のお客様も多いのですが､徐々にそういったツアーが増えてきているというような形になってございます｡それを経て、今年度から組織の増強を考えているというようなところになります。

続いて、観光連盟の組織体制です。根室管内１市４町の観光協会長が会長・副会長を担いながら、１市４町の首長に理事及び監事を担っていただいているというような形でございます。会員には、個別の一事業者さんというよりは、エリア内の経済団体や、旅館組合、交通関係がメインの会員になってございます。

続いて、観光連盟の組織計画です。根室管内全体の経済循環へつながるような事業をしっかりやりますと、そういうことを書いてございます。これを基本方針としながら、事業部門として、いわゆる総務的な部門と従来的な観光振興を行う部門と、昨今の流れに沿ったＤＭＯのイメージも持った地域づくり、観光地域づくりの事業に加え、収益事業等も現在、検討を進めているというような状態になってございます。

続いて、観光連盟の個別事業を記載しています。基本的には、公益部門という従来的な観光協会の業務もやりつつ、共創部門、収益部門といった新たな取組もここ数年しっかりと進めてきてございます。北方領土の関係も、こういったところでしっかりと新たに業務としてやっていければと考えているところでございます。

続いて、ここまでお話をしてきた欧米向けにやってきた事業ですとか、アドベンチャートラベル、高付加価値旅行などをまとめた資料になります。しっかりと旅行会社、オペレーターからのヒアリングをして、地域の方々と協力をして、体験商品をつくるですとか、インバウンドに向けたセールス、プロモーションについては、ここ３年間ぐらいで百数十社ぐらいの会社とセールスをしてきているところで、現在、おおむね年間 50 件ぐらい、インバウンド向けのアドベンチャートラベル及び高付加価値旅行と言われるようなツアーが入ってきているというようなところで把握しております。

また、モニターツアーやファムツアーについても、先ほどの北海道観光機構さんとも連携をしながら行っているところです。さらに、地元の専門学校で、ネパール、ミャンマー、タイ、ベトナムの生徒さんが多く、とても国際色豊かで、日本人のほうが少ないぐらいの学校に向けて、観

光の授業をやっています。例えば、昨年８月に知床羅臼岳でヒグマの人身事故がありましたが、そういったときに、生徒とディスカッションをして、正解は出すわけではないんですが、人を殺してしまったヒグマは駆除すべきかどうか等について生徒たちと話すような授業をやったり、まだやってはいないんですが、北方領土の関係も、非常に国際色が豊かな学校なので、活発な議論も期待できるのではないかなと考えているところです。

最後ですが、ツアーコーディネートとコンセプト設計ということで、これが、これまで知床ねむろ観光連盟が独立後の６年間でやってきたところの主たるところだと思っております。ＦＩＴ、団体バス旅行を含めた従来型旅行ももちろん重要ではあるなと思いながら、もうちょっと深い旅行をつくっていくことが大事だと考えています。

コンセプトをしっかりと伝えるというところが、直接的に伝えるのか、間接的に伝えるのか、もう少し具体的な話をするのか、より広い文脈で話したほうが伝わるのか、それをしっかりとコーディネートをして旅行に落とし込んでいって、ガイドがつくツアーであれば、実際のツアーの最中にインタープリテーションを行いながら価値を高めることをやってきているところです。

例えばですけど、知床羅臼でいくと、ただ流氷がきれいとか、オオワシの写真がすごい、料理がおいしいだけではなくて、どうしてそうなっているのかというのを、しっかりと、押しつけにならない程度に伝えるような取組をツアーでやっていく。それがお互いにとって価値になるのではないかと考えてやっております。

今回、北方領土問題の啓発促進策に関する有識者会議ということで、私なりにも考えてみまして、伝え方というところでいえば、北方領土の話だけで伝えるのか、もしかしたらホープツアーのような、例えば広島等では、このアドベンチャートラベル・高付加価値旅行の文脈で、自分ごとにしてもらって平和について考えようというツアーを結構やっているところが、私の仲間の中にもいますが、そういったものも考えられるかと思いました。北方領土のことだけをやるのももちろんプラスにはなると思うのですが、例えば、全体的な話として、日本の平和や日々の暮らし等について考えるツアーとして落とし込んでいくと、根室管内の深みも増すし、参加される方、理解度も増すのではないかと考えておりました。以上になります。

○矢ケ崎座長　ありがとうございました。こちらの観光連盟さんの歩み、現在やっていること、そして最後には、佐々木さんからの提案のような言葉もいただきました。ありがとうございます。

続いては、一般社団法人南知床標津町観光協会事務局長の清野和之さんです。よろしくお願いいたします。

○清野和之氏　本日はお時間をいただき、ありがとうございます。一般社団法人南知床標津町観光協会事務局長の清野和之でございます。

本日は、当協会が本州の高等学校様と共に取り組んでまいりました北方領土の平和学習ノートの作成並びに教育民泊体制構築の２テーマを軸に、実際の活用事例や、そこから見えた今後の方向性について御説明させていただきます。

御存じの方もいらっしゃると思うのですが、当町の概要について簡単に御説明いたします。標津町は知床半島の南に位置し、根室海峡の水産業と広大な酪農業を基幹とする生産の町であります。アイヌ語の「鮭のいるところ」という語源として、令和２年には、「鮭の聖地」の物語として日本遺産にも認定されております。

私たちは、体験型観光を軸に教育旅行の受入れを行っております。主体的に学んでいただいて、多様な他者と対話をしながら、当事者意識を持つ、持続可能な社会の作り手を育てるという目的を持って取り組んでおります。ですので、単なる見学旅行に終わらせず、知る、体験する、考えるという探究のサイクルを通じ、生徒たちの創造的な思考力や感性を育むプログラムづくりに努めております。

続いて、北方領土平和学習ノートについてです。学校での事前学習と現地講話のセットによる「自分ごと化」へのアプローチというサブタイトルを付けております。

作成の背景と教育の現場のニーズについてです。探究学習を核として作成したのが、学習の補

助教材となる、この北方領土平和学習ノートです。作成の背景には切実な現状とニーズがございます。現在、語り部の活動を精力的に担ってこられてきた元島民の皆様の高齢化が進む中、これまでの貴重な御体験や正しい歴史的経緯を、いかに次世代に確実に受け継いでいくかが非常に重要なテーマとなっております。

同時に、教育現場からは、限られた修学旅行の時間の中で、現地でのお話について更に理解を深めるためにも、事前にしっかりとした予備知識を持たせて学習効果を高めたい、「自分ごと化」してもらいたいということと、社会科の先生以外でも、迷わずにスムーズに教えられる事前学習教材が欲しいというニーズが寄せられておりました。これらの課題を解決するために作成したのが本ノートになっております。ノートは、生徒向けのノートと、先生向けの赤ペン入りのノートもございまして、教育に便利で使いやすいようにしております。

本ノートの特長について御説明いたします。まず１つ目が「気づきメモ」です。振り返りのページを随所に配置しまして、「自分ごと化」への設計を考えております。２つ目は、地理や歴史、文化を体系化し、現地の講話を効果的にするための知識の整理をしております。３つ目は、動画や画像へアクセスできる２次元バーコードの配置によるデジタルとの融合、４つ目が、ポイント整理や穴埋め問題を配置した担当教科を問わない高い汎用性です。

続いて、本ノートを実際に導入いただいた学校様での具体的な事例をお伝えいたします。ノートと講話を連動させたことによって生徒の変容がございました。実証に御協力いただいた学校では、修学旅行の事前学習として本ノートを活用して授業４コマを使って、プログラムを組み立てていただきました。歴史や地政学の地理の基礎を習得した上で、学校として設けたテーマが、「なぜ北方領土は返ってこないのか」という問いを立てて、生徒たちに政治、経済、国民感情の３つの観点から、自ら調べてもらって、ディスカッションを行う授業の実践を行いました。

この事前学習を経て、現地で、歯舞群島の多楽島出身の福澤英雄さんによる講話を聴講いただきました。ノートを通じてあらかじめ背景知識を学んで臨んだ生徒たちは、結果として、「事前学習の段階では憎しみが持っているものという想像をしていたが、心を開いて、未来に向けた交流を大切にされている事実に驚いた」という声ですとか、「本当にそこで生活した人がいるのだということを肌で実感できた」という声が上がりました。

さらには、「元島民の方がふるさとを追われた体験を自分の身に置き換えて考えてみることこそが、この北方領土問題の理解には不可欠なのが分かった」という声がありまして、目標としていた「自分ごと化」をするというところの気づきについての報告が上がりました。単なる解説本ではなく、事前学習ノートと現地の講話をセットに組み立てることによって、客観的で多面的な理解を導くことができたということで、一つの成果として考えております。

一方で、今回の活用事例を通じて、プログラムの質を更に向上させるための課題にも直面しております。それは、学校でのノートの学習と現地での講話の内容の連動性をいかに高めるかという点です。事前学習での問いや学びが現地の講話内容とかみ合ってこそ生徒の学びは更に深まるので、特に生徒がこの課題を本当に更に「自分ごと化」するためには、これまでの歴史をひも解くだけではなく、現在の自分たちへとつながる未来への視点が不可欠だと考えました。

そこで、今後目指す方向性として、まずは講話の枠の再構成が挙げられるかと考えております。これまでの形に磨きをかけて、過去の歴史的なお話の部分と、それをノートでの探求を現地で講話を通し、これからの国際平和を見据えて、「これからの未来・最新情勢」という２部体制での未来志向型のプログラムへと再構築していくことが考えられます。

また、年間計画や修学旅行のタイミング、事前学習に割けるコマは学校によって様々なので、学校のスケジュールや状況に合わせて協議をオンライン等で行って、現地での話とのすり合わせを行っていくプロセスが重要と考えております。こういったことを通して、持続可能な連携モデルの確立を目指しております。

続きまして、教育民泊体制構築についてです。北海道では農林漁家が受入先となる民泊が中心ですが、さらに、地域の一般家庭の皆さんにも御協力いただけるような民泊のプログラムの体制と仕組みづくりを目指しております。

教育旅行民泊の理念と目的ですが、生徒をお客様として迎えるのではなくて、家族の一員とし

て受け入れて、ありのままの生活を体験いただくという理念でございます。家庭での普段の暮らしそのものが子どもたちにとっての大きな価値と考えております。

活動を通して子どもたちに変化が見られておりまして、最初は緊張や不安を見せていた生徒も、家庭の日常に入り込み、共同調理などをすることによって打ち解けた。魚嫌いだった生徒が魚を食べられるようになった。御家庭でも食べるようになったという成長のきっかけにもなったということで、単なる教える場ではなくて、一緒に過ごすことで生徒が変わっていくという場面をつくっていました。また、ここの地域の農林漁業・農林漁村文化体験というところも大切な視点なので、そこについても今後考えていくといったところです。

事例の紹介です。２分程度、動画のほうを御用意しましたので、御覧いただければと思います。これ昨年度、奈良県の高校生が６名の受入を行いまして、そのときの様子になります。今回、農家さんと漁家さんの御家庭で受け入れてくださって、今映っているのは漁家さんのお宅です。この方は鮭定置の漁家さんの女性です。子どもたちは、学校で家政科というコースで学びに来た３年生です。料理についても学べる御家庭を希望されていまして、こちらにお願いをしました。

今、標津で受け入れている教育旅行の目的を８つにまとめております。北方領土学習も１つの目的としてお越しいただいております。

今後の展望としましては、「鮭の聖地」の物語と北方領土の学習と、教育民泊を軸にして、更なる体制作りと御協力をいただきながら進めていきたいと考えております。

御清聴ありがとうございます。

○矢ケ崎座長　ありがとうございました。大変興味深い活動について御説明をいただいたと思います。ありがとうございます。

それでは、続きまして中標津町経済振興課観光振興係係長の篠永けい子さん、よろしくお願いいたします。

○篠永けい子氏　中標津町経済振興課観光振興係長をしております篠永と申します。本日は貴重な機会をいただきありがとうございます。中標津町経済振興課観光振興係として御紹介をいただきましたが、御紹介させていただく事例は、根室管内教育旅行誘致推進協議会の活動についてお話をさせていただきます。

この根室管内教育旅行誘致推進協議会の設立の経緯について資料を御用意させていただきました。市町を超えた取組を協議会でやっているというのは珍しいですねと言われることが多いです。これまでは各市町単独で行っていた教育旅行の誘致活動を、根室地域が一体となって広域的な取組ができないかという検討が平成 24 年４月に行われまして、根室管内１市４町が参画し、事務局は中標津町となりました。

平成 24 年６月 29 日に、「地方空港を活用した教育旅行誘致の連携と協力に関する協定」締結と記載しておりますけれども、航空会社や旅行会社様と連携協定を結ばせていただいております。この連携協定により、業者の皆様の助言もいただきながら、根室管内一体となって道内外の学校や旅行会社様に様々なプロモーションを行っているところでございます。現在、令和７年にも新たに日本航空株式会社様に協定に加わっていただいたところです。

続きまして、もう一つの資料が、「ひがし北海道（知床ねむろ）への修学旅行へのご案内」で、これは実際にプロモーションの中で使っている資料になります。かなりページ数があるので、部分的に紹介をさせていただこうと思います。

次のスライドが、知床ねむろの概要ということで、まずは根室管内の市町の紹介をしています。自然体験学習ができる、それから酪農、水産業などの産業学習ができるということを紹介させていただいています。また「近くて遠い」北方領土ということで、日本固有の領土である北方領土を肉眼で、「こんなにも近いんだ」と感じることができるということをまずお伝えさせていただいております。

それでは、資料７ページについて、「遠いけど近い」知床ねむろということで、北海道は遠いのですけれども、飛行機を使っていただければ意外と近いですよということでＰＲをさせてい

ただいています。根室中標津空港は東京（羽田）直行便もございます。それから新千歳空港を経由して道外から来ることも、根室管内に来ることもできますということで御紹介をさせていただいています。

また、下のほうに赤字で書かせていただいておりますが、令和５年 10 月 29 日から札幌丘珠空港と中標津空港のＨＡＣ便が就航しております。大きな学校ですと女満別空港や釧路空港を使うことも多いのですけれども、道東の修学旅行の後にＨＡＣに乗って丘珠空港に飛んで、今度道央のほうのコースに移動するという学校も実際にありました。

広い北海道でいろいろ見たいとなると、バスの移動がなかなか大変だと思うのですけれども、こういった事例を紹介することによって、様々な行程を組むことができるということがお伝えできると思っています。近年、学校が修学旅行に求める要素、学習の狙いが、学習指導要領の改訂によって、探究学習だけではなく自主的な学びというところも求められるようになったと思います。

ちょっと前の修学旅行ですと、学年みんなで何クラスも一緒に飛行機に乗って、同じところに行って、同じものを見て、バスに乗って移動するというようなものだったかもしれませんが、現在の学校の修学旅行というのは少しずつ変わってきていると思います。様々なコースが用意されていて、生徒は興味関心のあるものを選ぶことができ、小さいグループで移動するケースが増えてきていると思います。

根室管内の場合は、宿泊施設のキャパだとか、あと受入施設の状況ですとか、もちろん飛行機の就航状況や飛んでいる機体の状況によって、大きなグループの受入れがなかなか難しい状況があるのですけれども、そういった自主的な学びということで、小さいグループになった場合は、とても相性がいいと思っていますし、先ほど御紹介させていただいたように、グループで来られている場合は、飛行機に乗って移動することも可能であるというような御紹介ができると思っております。

それでは、資料 19 ページについて、北方領土問題対策協会からの補助制度ということで御紹介をさせていただいております。北方領土を目で見る運動、修学旅行等誘致事業の補助金など、根室管内を訪れて北方領土学習プログラムを受けた場合、こういった助成を受けることができるという御紹介をさせていただいております。

次の資料では、受入れ実績も御用意をさせていただきました。根室管内教育旅行受入れ実績ということで、令和７年度の受入状況を表示させていただきました。この資料の中に記載はないのですけれども、多くが関東や関西の学校を中心として来られているという状況です。26 校の受入れとなっていますが、このうち 20 校が先ほど御紹介した北方領土を目で見る運動の補助金を活用して来ている学校になります。「飛行機を利用していただければ、意外と近く感じることができますよ。すぐ来ることができますよ」と御紹介をさせていただいても、宿泊施設や飛行機代も少しずつ高騰している状況がある中で、学校も限られた予算の中で深い学びを求めているため、こういった補助金っていうのがとても大きいということで、ぜひ引き続きこの補助金が活用できるようにお願いしたいという声を学校や旅行会社さんからもいただいているところです。

次のページが教育旅行誘致推進協議会を設立してからの推移となります。一度、令和２年度に、コロナで受入れがなくなったところではあるのですけれども、令和４年度、令和５年度で、もともとの受入実績よりも大きく実績が伸びた状況となっています。ただ、令和６年度、７年度はまた少し減少傾向にあります。これは、もともとコロナで海外に修学旅行に行っていた学校が、行き先を北海道に変えたという状況があったのですけれども、再び海外のほうに戻ろうとしている状況があって、少し減少しています。

ただ、最近の情勢で、海外旅行に行くにしても、いろいろ費用がかさむという状況もあるので、改めて修学旅行の行き先を見直し、検討する学校があるかと思います。そういった学校のほうにプロモーションをかけていこうと思っているところです。根室管内教育旅行誘致推進協議会としましては、みんな同じところに行くというような公立学校よりは、どちらかというと深い学びを求めて、「そのためだったら頑張って少し離れたところでも行きます」というような私立の学校ですとか、少し偏差値の高い学校がこの根室管内との相性がいいかというふうに考えて、そう

いった学校へのプロモーションを考えております。
　そういう学校ですと、例えば国際交流というか、国際的な感覚を大事にする学校も多かったりする中で、北方領土学習がどういうふうに取られるのかなと思ったこともあるのですが、実際に学校を訪れて先生たちと話をしてみると、国際的な感覚も大事だけれども、まずは日本人として何を大事にしなければいけないのかということもしっかり学んだ上で国際的な学びを深めていくのが大事だと思っているというようなお話をされている学校もありました。
　生徒さんからすると、北海道で、どちらかというとアクティビティー色の強い体験を求める傾向があるのですけれども、そういった生徒さんのニーズに基づいて、ウトロだとか、そういったところに行っていた学校が、「そこまで行くんだったら絶対北方領土学習は外せないでしょう」というふうに社会科の先生が強く望んで、根室管内への修学旅行に変えたというような学校も聞いております。そういったお話をまた別の学校でもお伝えして、根室管内への修学旅行の誘致を進めてまいりたいと考えております。

○矢ケ崎座長　ありがとうございます。最近の修学旅行の事情も含めて、よく理解できるように御説明いただいたと思います。
　それでは、今ほど御説明いただきました３名の方々に対して御質問等ございましたら、承ってまいりたいと存じます。オンラインで御参加の方はウェブ会議のシステムの挙手ボタンでお知らせください。佐々木先生、どうぞ。

○佐々木構成員　佐々木です。御丁寧な御説明ありがとうございました。最初の佐々木さんと清野さんのところで共通していたお話がありましたので、お２人に共通して２つお伺いしたいと思います。
　まず１つは、どちらの組織も戦略的に計画立てて、すばらしい活動をしていると思ったのですが、ちなみに実働するスタッフはどのくらいの人数がいるのかを佐々木さんと清野さんに伺いたいというのが１つ目です。
　同じくお２人の話の中で、「自分ごと化」することの難しさと大切さのようなことが共通した話題だったと思います。ちょうど、これ偶然なのですけれど、私は７月９日に広島市が主催している第１回「平和文化のまちづくり懇談会」に委員として参加して、そのときに幾つか議題、論点があったのですけれど、その中で、今まで広島の平和記念資料館やまち全体でも、広島の被爆の実相を伝え過ぎていて、どんどん若い人たちがそれについて、嫌悪感とは言わないけれども、その感覚的なところが拒否をしているのではないか、だから、どういうコンテンツを展示すればよいかというときに、その会議の中では、多くの方々がその後の戦後の広島の復興や今のまちづくりにどうつながっているのかというところまで語ることが大事ではないかというお話がありました。そういうことも関係しながら、この北方領土問題を「自分ごと化」するときに、ただ北方領土のことを伝えるだけではなくて、どうしたら自分の中で考えるようになるかということについて、一番大事な要素はどんなことだとお考えになっているかという、漠然としたことですけれども、その２点をお２人に伺いたいと思いました。

○佐々木亮介氏　知床ねむろ観光連盟の佐々木です。まず１つ目の質問なのですが、スタッフは今１名でやっております。令和２年度に独立をして、そのときに１名で、そこから６年間いろいろとやり続けてきて、今年度予算を少し人件費として計上しており、１市４町の御協力、御理解もいただきながら、今年度から２人体制になるというところでございます。
　そのため、知床ねむろ観光連盟でやっていることに対して、スタッフが２人３人といれば、ここに記載している計画に基づいて、もっとしっかりやれるのになという感覚はございますが、今までは１人でやってきたというところでございます。
　２つ目の質問ですが、最後に私のほうから広島の話も少ししたのは、広島もピースツアーというコンセプトツアーをしっかりつくっています。「ｓｏｋｏｉｋｏ！ピースツアー」という、サイクリングをしながら、平和について考えるツアーをインバウンド向けにやっているところの

代表と仲がよくて、今週も月曜日に東京で会ったときにいろいろ話してきました。
私も２年ほど前にその視察に行って、まず衝撃を受けたのが、「自分ごと化」させるのがとても上手なのですよね。あまり深刻な話よりも、まず、施設利用として広島の平和公園にあるレストハウス、展示があるところに集合をして、そこで用意を整えて、ちょっと下勉強をして、そこからサイクリングツアーに向かうという形なので、施設と体験の組み合わせがとてもいいなと思いました。
その後、原爆ドームの前で説明をしっかりするよりも、「佐々木さんは朝の８時半って何してます？」のようなことをふっと聞かれて、「職場に着いてちょっとコーヒー入れたぐらいで、仕事始めようかなっていうタイミングなんですが」みたいなことをやり取りしていて、参加者みんなに聞いてくのですね。「まさに佐々木さんがコーヒーを入れたタイミングで原爆が投下されたんですよ」という話の持っていき方がとても巧みで、それがまずすばらしいなと思いました。
その後、平和公園はさらっと過ぎていって、広島の市電のところに連れていっていただいて、その市電のところでも、「この市電、原爆の後、何日後にまた走り出したか分かりますか」と聞かれて、普通、数年かかるのかなと思っていたら、「３日後です」という話がありました。「それが希望になった」「勇気になった」という話を聞いて、ぞくぞくとしました。最後の締めのときに、アメリカ人のツアー参加者もいる、むしろ結構多いというのを聞いて、どういう雰囲気になるのかを聞いたら、「国と国で考えてしまうと難しいことも、個人で見ると、とても理解がお互いに歩み寄れる」とか、最後にお互いに泣いて抱き合うことも多いという話を聞きました。
それを聞いたときに、北方領土のことも自分のエリアとして考えるのですが、どう「自分ごと化」させるかという、うまくインタープリテーションが必要なのかなというのはとても感じたところです。私も道東出身ですけれど、北方領土だけを考えると、あまりイメージが湧かないときももちろんあります。ただ、日本全体のこととか、自分の生活の話とか、そういったところまで思い及べば、とても大事な話なのだろうというのは誰でも分かるのかなという気がします。そのため、具体と抽象をどう行き来するか、どう「自分ごと化」させるかというところがこういったものには必要なのかなというのを感じました。
余談かもしれないのですけれど、ロシアにとって、どうして北方領土を不法占拠しているのかというところも、軍事的な話だけだとイメージが湧きにくいところも、海産資源、漁業の豊かさであったりとか、ラッコの繁殖だとか、鳥が中継地点として行く場所であったりとか、私たちができることとしては、そういったところからも語っていく必要があるのかなというのを感じました。

○清野和之氏　南知床標津町観光協会の清野です。御質問ありがとうございます。
１点目なのですけれども、実働のスタッフとしては、基本的に職員は３名おりまして、期間限定で地域おこし協力隊が１名いるので、４名の事務局体制で行っております。そのほかにガイド協会という組織の教育旅行に対応するグループがありまして、そこと連携しているほか、臨時的にサポートいただく職場の関係者もいるので、そういった体制で取り組んでおります。
「自分ごと化」についてなのですけども、先ほど本州の高校生が実際にお話を聞いて、また先生のお話も聞いたのですけども、そのときの先生の問いとして、「今住んでいるおうちから出ていかないとならないっていう状況を考えたときにどう思うか」というものがありました。それは、いま自分が住んでいる家に住めなくなるということから、北方領土の元島民の方がそういった状況になったというところの理解を深めていったという工夫を先生のほうでされておりまして、そういった「共感をする」というところが大事だと考えています。
また、福澤英雄さんのお話の中で、最初、「ビザなし交流」でホームステイを受け入れていたときに、自分は追われた身だけども、そういう人たちを家に受入れるというところにかなり葛藤があったということでした。そこで福澤さんが取った考え方が、いつまでもマイナスなことを考えていても仕方ないので、前向きに行こうと受入れをしたという精神的な部分の大切さを伝えていくことが大事かなと思います。
これは、教育旅行や民泊における心の平和をつくっていくというところと、交流を大切にする

ということも一致していると思っているので、そういったところの教育において、交流を大切にできるようなことが「自分ごと化」するというところで大事かなと考えております。

○佐々木構成員　お２人の現場の実際の話を聞いて、感動しました。そういう展示の仕方や伝え方をぜひこれから工夫できたらと強く思いました。今、私この４月から小樽の総合博物館の館長もやっていて、現場を預かっている立場なのですけれど、その施設が持っているコンテンツと、人を介したコミュニケーションの、この２つがセットにならないと、なかなか感動とか、要するにお客さんの中でのナラティブが生まれないと実感しているので、今みたいなお話を聞いて正しかったんだなと感じました。

○矢ケ崎座長　ありがとうございます。私も広島に関しては、３日後に市電が走ったというのをテレビか何かで見たときに、鳥肌が立ちました。うちの学生たちも毎年行っているようです。いきなり非常に強い体験のことを話されるというよりは、今の若者たちが入っていきやすいアプローチの方法があるのだとも思いました。
　では楓先生、どうぞ。

○楓構成員　官民双方から高付加価値の旅行を作ることを求められ、悩みも深いかと思います。このアドベンチャーツーリズムに取組んでいる民間の事業者さんは何社ぐらいありますでしょうか。また、自走していらっしゃるのか、何らかのサポートが入っているのかも教えてください。
　この分野は、北海道では阿寒が先行して取り組んでいますので、お客様層が重なることもあるかと思います。「阿寒の次にはぜひ」というような上手い連携ができているのかどうか、その辺りを教えていただけますか。

○佐々木亮介氏　アドベンチャートラベルの取組は、令和２年度から少しずつ動かし始めて、最初は何も分からない中でやっていました。単費の予算があるわけではないので、北海道観光機構の事業の力を借りて、少しずつ動かし始めたところです。先ほど資料の冒頭に記載したブランディングだとか、何が重要なのか、ツアーの組み立てについてなど、少し事業を使わせていただいて、３年４年とやってきていたところです。
　昨年度、今年度に関しては、個別には事業は取っていません。それを自走と呼べるかどうかはまだ難しいところがございますが、事業を取っていた間の令和５年度までに、地域の事業者さん等と一緒にツアーづくりをしたり、体験アクティビティーや食事を整えていったり、ガイドをできる人材とつながっていったり、私も広島も含めてそれで行っているのですけれど、先進的な事例を学んだりということを進めてきた。
　令和６年度、７年度に関しては、特段そういったところに予算を多く使っているわけではないのですが、年間、把握している範囲で約 50 件のツアーは入ってきているので、それなりに数は入ってきています。ただ、今課題だと思っているのが、例えば羅臼でいくと、もう１年以上前から宿が取れないという状態にもなってきているので、いわゆるアドベンチャートラベル的なツアーをやりたいというオーダーを海外もしくは国内の旅行会社から受けても、１年前でも手配がし切れないことがあります。例えばクルーズはまだ余裕があるからと、クルーズを推していっても、宿が結局取れませんということが結構多い状態です。
　そのため、その問題に対して、別のコンテンツをしっかり育てていくというところは、羅臼だけにかかわらずこれから全体で考えていかなければいけないなと思っているところなので、そういう意味ではまだ自走というよりも、もう少し形を変えながら、ほかの事業も活用させていただきながら、しっかり考えないと、どこかで上限に来てしまうというか、難しくなってくるのかなと考えています。
　もう一つ、他地域の連携に関してですが、おっしゃっていただいたとおり、阿寒に関しては道東に来るそういったツアーの拠点になっています。釧路ないしは女満別から入って、宿泊はほとんどが阿寒と知床、ウトロになっているので、そういったところが拠点になっています。そのた

め、連携もしていますし、旅行会社がツアーを組むときも、しっかりと阿寒に入ったお客を阿寒だけでとどまらせるのではなくて、根室管内にも来ていただいていたりします。
例えばですが、羅臼でクルーズを見たり、尾岱沼でバードウオッチングもしくはハイキングをしたり、標津のポー川のハイキングをしたり、根室でバードウオッチングをしたり、中標津でいけば、「湯宿だいいち」でフクロウを見たりというのは、実際のツアーにあります。全部が全部しっかりと周遊するわけではないのですが、１個の地域だけで完結はしていないというのが、少しずつですが、根室管内含め、道東を広く体験いただくような連携はそれなりにできてきているのかなと思っています。
あとは、阿寒の「鶴雅アドベンチャーベースＳＩＲＩ」の個人のお客さんも、何日か滞在をして、そろそろ行くところがないといったときに羅臼を御紹介いただくなど、個人やＢｔｏＣの動きでもそういったものはあるので、しっかりと地域を周遊しながら楽しんでいただく体制は少し見えてきているのかなとは思っております。

○矢ケ崎座長　ありがとうございます。本間先生、いかがですか。

○本間構成員　清野さんの北方領土の平和学習ノートについて少しお伺いできればと思います。私も、こういう施設とかそういうものと教育学習みたいにつなぐようなものをつくるということを研究でやっています。それで、お話を聞きながら、勉強になるなと思ってお伺いさせていただいたのですけれども、学習に合わせたというか、写真も控えめにしたりとか、イラストを使っていたりといろいろあると思うのですけれど、内容を決めるときは結構大変だったと思います。
私もつくるときに、勉強として覚えてほしいというところと、大人になった後でも印象に残ったままでいてほしいというところを、結構悩んだりすることがあります。その後、修学旅行などで来てもらうには、国際的な視点というところで、今どうしても日本からの視点が多くなってしまう部分もあったりして、例えばロシアから見るとまた違ったりもする、そういうことをどういうふうに学んでいったらいいのかが難しいのかなと思っています。
何かこういうふうな内容を盛り込もうとか、ここに鮭の話を入れようとか、この辺りはスムーズに決まったのでしょうか。例えば学校の先生を巻き込んでいるとか、何を基準に内容をセレクトして編集していったかといった、編集軸のようなお話を少し伺えればと思いました。

○清野和之氏　ありがとうございます。ノートは、基本的には講話とセットとまず考えています。その発端としては、現地へ来ていただいて、貴重な経験の話を聞いていただくのですが、もっと背景的な知識があると、より理解が深まると感じていて、その中で学校から、北方領土学習で訪問するときに、事前学習として映像や教材がないだろうかという相談があって、２年間かけてつくって、今３年目になっています。
地理・歴史の部分は、社会科の先生の視点からはそこをまず押さえるとおっしゃっていたので、そういったところを気にしていました。歴史は、北方領土の江戸時代の部分から遡って、今現在の取組について書いています。
その後、講話についてというところで、前編・後編という形で、島に住んでいたところと、そこを追われたお話、元島民の方の平和、２世代、３世代、４世代の活動に展開できるような構成にして、標津についても知っていただきたいので、そういったところを記載するという構成でつくっていました。
そのため、基本的に元島民の方のお話のベースがあって、そこからいろいろ考えていったので、ここはつくり上げるに当たっては、あまり悩みはなかったです。ただ学校の先生に聞くと、社会科の先生はこの教材使いやすかったという部分があったのですけど、国語の先生は、生徒に調べさせて発表させる方法に切り替えたというところでした。国語の先生の視点から言うと、30 分程度の動画が掲載されている元島民のチャンネルがあって、そこを見るのですけれど、10 分程度の動画やスクリプトがあれば、先生も、限られた時間の中で授業の組み立てができるため、そういった副教材的なものが必要と考えています。

○矢ケ崎座長　ありがとうございます。なかなかプロセスも興味深いものがありますよね。

○楓構成員　修学旅行の件について、およそ 3,000 人の受入れということなのですが、教育旅行は経済効果だけではない受入れる意義は、多くあると思います。ただ、営業、プロモーションにかける費用や、全体のコストを考えた上で、実際に受入れている方たちが、社会的意義だけではなく、実感として、ある程度経済的に効果があると受け止めているのかどうか、本音のところを伺えればと思います。

○篠永けい子氏　根室管内教育旅行誘致推進協議会事務局の篠永でございます。修学旅行の受入れをしている方たち、その施設だとか、北海道の方だとかが経済効果を実感しているかどうかというところは、正直そのことの確認をしたことがあまりないのですが、ただ、先ほども触れたのですけれども、根室管内のキャパシティーがそんなに大きくないという状況があります。このままどんどん数を増やしていくということが、もちろんできたらいいのですけれども、あとは観光シーズンと修学旅行のシーズンが少しずれていることもあるかと思うので、そこがうまく合致して、常に人が来ているような状況につながるといいのかなとは思っています。

基本的にはキャパの状況もあるので、単純に数を増やすという目標でいくのは難しいと思っていて、その中でさらに経済的なものを求めるとなると、単純に考えると単価を上げるということになってしまうかと思うのですが、そうなってしまうと、学校も限られた予算の中で何とか修学旅行の行程を組んでいて、補助金も使いながら行程も組んでいるという状況ですので、単価を上げるということも難しいのかなと今思ったところです。

ただ、学校は、本当にずっと何年も来てくださっている学校もあるのですけれども、３年程度で行き先を再度検討する傾向がありますので、常に一定数の学校に来ていただけるように、とにかく働きかける必要があるのかなと考えております。そのため、そこに費用対効果を結びつけると、またなかなか成果として難しい部分もあるのかなと感じていますが、常にいろんな方にこの地域を知ってもらう、もし実際に学校がこの地域を訪れなかったとしても、興味は持ってもらえたのであれば、それはプラスというふうに捉えるようにしております。

○矢ケ崎座長　ありがとうございます。ちょっとお答えづらかったかもしれませんけれども、ちゃんとニュアンスは伝わってきたと思います。

篠永さん、私も１個だけ御質問させていただきたく、端的な回答で結構です。

これから北方領土の資料館、これが今の古くなったものを新しくしたりとか、中身をよくしていったりとか、全体的な連携を取って魅力を向上していくということが、今後近い未来に行われるとなったときに、教育旅行にいっぱい来てもらって、いっぱい使ってほしい、要するに修学旅行商品の中に、レベルアップした北方領土関係について伝えるための資源を入れ込んでいきたいと思いますが、そのときには具体的にどういう動きになるのでしょうか。

この協議会さんにお伝えをしていくと、連携協定に入っている旅行会社の方々がそれを咀嚼して、教育旅行の商品をつくって売ってくれるという商流の仕立てになっているという理解でよろしいですか。

○篠永けい子氏　本日皆さんに御用意した資料とは別にはなりますが、体験学習プログラムの冊子もつくって、学校や旅行会社さんにお配りしております。その中で、体験・見学施設の御案内の中に、北方領土学習ができる施設は新たにお伝えすることはできると思いました。また、旅行会社さんからのプロモーションというよりも、学校側が結構こだわりを持って行程を組むこともありますので、両方に引き続き働きかけていく必要があると思っています。

○矢ケ崎座長　分かりました。業界用語で、プロダクトブックがきちんとできているということはすばらしいと思います。ありがとうございました。

（休憩）

○矢ケ崎座長　それでは、そろそろ再開とさせていただきます。羅臼町企画財政課課長の遠嶋伸宏さん、よろしくお願いいたします。

○遠嶋伸宏課長　私のほうから道東自然系施設ネットワークに関係して、資料５－１から５－３について説明させていただきます。

実は、このネットワークは役場関係の関係団体ではなくて、北海道の道東の自然系の施設の運営されている方たちが、自発的にネットワークを作って取り組んでいるものです。担当者は繁忙期で本日参加できないため、担当外ですが、私が簡単に説明させていただきます。

簡単に資料５－１にまとめておりますけれども、設立の目的としましては、道東を拠点として自然をテーマに活動している施設が連携・協力して、来訪者に対して自然の理解を深めていただくために何か取り組んでいきましょう、道東の自然環境の保全、地域の持続可能な発展を目指しましょうということで設立されております。

主な活動としましては、まず１つ目、「はしごプロジェクト」ということで、道東も広いものですから、各施設で同じ時期に同じものが見られるとは限らないものです。今が旬の自然、花、植物、動物などを掲示して、「この施設ではこれが見られますよ」、「ほかの施設では、今、これが旬ですよ」ということを紙で印刷して掲示しています。あわせて、２番目の「月刊生き物予報」のほうも同じように、今が旬の生き物について掲示しています。

３つ目が、根室・オホーツク・釧路の各振興局のホームページ上で、この「はしご情報」を載せて公表していただいているということでした。４つ目は、共通のガイド・マップも整備しておりまして、今日はお見せできませんけれども、各施設に掲示して、来訪者が持って帰って、それを見ながら散策できるようにしてあるということです。５つ目、施設相互研修・ワークショップということで、それぞれの施設の職員のスキル、知識などを深めて、来訪者に対して、もっといい情報を、わくわくするような情報を伝えるために、ワークショップを開いているということです。ちなみに昨年度は、クマ対策に関するワークショップを開きました。６つ目はウェブやメーリングリストによる情報共有です。

構成施設については全部で 16 施設ありまして、毎年事務局を輪番制で回して、過度に負担にならないように取り組んでいるということでした。

資料の５－２ですけれども、これは令和７年度の道東自然系施設ネットワークの総会資料をいただきましたので、抜粋させていただきました。先ほど説明した、主な活動の１から６までが少々詳しく載っております。例えば、「はしごプロジェクト」ということで、霧多布湿原センターの掲載がありますけれども、オープン時期や休館日、貸出できるもの、今何が見どころなのかが書かれていたり、「月刊生き物予報」では、これは 10 月が例になっていますけれども、記号を使いまして、どの施設に行けば何が見られるかを一目瞭然の形で掲示をしています。

根室振興局とオホーツク総合振興局のホームページで、先ほどの「はしご情報」を掲載していただいています。なかなか振興局のホームページは、観光される方がのぞきに行くところではないと思いますけれども、少なからずアクセス数があるということで、これをいかに伸ばしていくかは課題としても認識しているということでした。

施設相互研修ですけれども、ワークショップにて、和気あいあいと取り組んでいる風景が掲載されていました。

北方領土の関係は、特にこの中では触れていないのですけれども、例えばワークショップに近しいことでいえば、根室振興局さんのほうで、「語り部の声を聴く会」を毎年開催していただいています。というのも、元島民の方たちも高齢で、語れる方も毎年少なくなっていくので、北方領土を担当されている各自治体の職員、担当課向けに、一度語り部の話を聴いて、仕事に生かしてもらうという目的で、北海道が積極的にこういう研修を開いてくれています。この隣接地域の啓発施設も連携しながら、既存の事業なども取り込みながらやっていくことができるかもしれ

ないということで、参考までに御紹介させていただきました。
資料５－３は設置要綱になっています。附則のところを見ていただくと、この要綱は平成 17 年より施行するということになっておりますが、実は、平成 17 年よりもさらに十数年ぐらい前からやっているということでした。基本は行政ではないので、緩やかに長く続けるように、みんなに負担にならないような事業をやっていきましょうということで取り組んでいるということです。
ちょうど平成 17 年は世界遺産登録の機運が高まって、４月になったら知床が自然遺産に登録されるのではないかという動きもみんな分かっていたので、その頃を目がけて設置要綱をつくるなどして動いたのではなかったかと昔の記憶を振り返っておられたのを担当者から聞いてきました。
簡単ですけれども、道東自然系施設ネットワークについては以上でなります。
続けて、資料５－４、道の駅知床・らうすデジタルサイネージの概要について説明させていただきます。こちらは羅臼町の観光担当が担当ですけれども、今まさに繁忙期に突入して、なかなか一緒に来られないということで、資料をいただいてきました。
導入の目的と背景として、道の駅を訪れる観光客に対しまして効果的な情報提供を行いたいが、それに対してしっかりした掲示物がなかったということで、デジタルサイネージを使ってお知らせしたいということで始まったもののようです。近年外国人も増えてきているので、どうせなら多言語対応できるようなものを設置しましょうということで、日本語と英語と簡体字、繁体字、韓国語の多言語でやっております。
導入には、デジ田の第２世代交付金を活用して、2,000 万円ほどかけたとのことでした。ここには観光案内所がありますが、お１人もしくは繁忙期にはお２人で対応しています。外国人でも日本人でも対応をしていると、どうしても次に待っているお客さんの対応ができません。簡単な問合せはこういうデジタルサイネージで解決できるのではないかということも思いとしてはあったとのことです。
デジタルサイネージの特徴になりますけれども、先ほどお話ししましたが、多言語で操作可能な環境にしています。また、観光情報の網羅的発信ということで、飲食店、観光スポット、公共施設等の情報をタッチパネルで分かりやすく提供しています。この中に羅臼国後展望塔も入れていただきまして、タッチパネルで施設の概要が出るようになっています。
それと、もちろん防災と緊急時対応についても、エリアメールと連動しており、緊急地震速報や津波警報が発令されたときには、自動的にこのサイネージが黄色い画面の緊急モードに切り替わり、危険な状況が分かるようになっているということでした。
ただ、その部分については多言語ができておらず、システム的に日本語のみということでしたが、次のリモート更新・監視システムのところになりますけれども、役場の観光担当のパソコンからサイネージにテキストの文字を送信できることになっておりまして、外国人の方には、もともとパソコンに用意してあるテンプレートをそのまま送信すると、そこに表示させることができるようになっているので、災害時のときにはそのように取り組むことになっているということでした。
２枚目には、いろいろな施設を紹介しています。せっかくですので羅臼国後展望塔の紹介について写真を撮ってきましたので、貼り付けております。観光スポットはいろいろありますけれども、羅臼の観光スポットとして羅臼国後展望塔を掲載しています。先ほどの最初のお話でもあったかと思いますが、北方領土というよりも、圧倒的に自然や風景を目的として訪れる方が多いので、まずそういう人を対象に、学習ではなく、観光スポットとして紹介しているということです。
国後展望塔の左の写真ですけれども、多言語で表示になっておりまして、それを押すと、右側の写真のとおり簡単な施設の紹介が見られます。そしてＱＲコードを通じて携帯でも見ることができるようになっているということです。
４つ目、システム運用の柔軟性ということで、先ほどもお話ししましたけれども、エリアメールの連携に加えまして、手動による操作・配信もできるということです。エリアメールではどうしても避難場所の指示ができないので、テキストメールで避難場所の更新やそこで必要な情報

を柔軟に発信することが可能ということでした。
５つ目、観光と北方領土啓発の相乗効果ということで、観光客への自然な動線、観光周遊中にデジタルサイネージを利用する過程で、北方領土に関する情報に触れる機会を創出ということです。また、多言語による啓発の拡大ということで、今までは日本語のみで提供されていた情報も多言語にすることで、海外からの観光客へ北方領土の現状を伝えることができる可能性も増大します。滞在型観光の推進ということでは、展望塔へ足を運ぶための具体的な情報提供により、羅臼の滞在時間を延ばし、地域文化への理解を深めていただくことにもつながるのではないかということです。
最後ですけれども、今後の活用方針といたしましては、単なる観光案内にとどまらず、本システムの持つ多言語発信力と更新の即時性を生かして、北方領土の歴史や現在の状況を感じてもらえるようなコンテンツの充実を図っていきたいと思っております。事務所も隣の課に観光担当がおりますので、常に話をしながら、どうにか観光と北方領土啓発というのを連動してできるように事務を進めていければと思っているところです。

○矢ケ崎座長　どうもありがとうございました。
それでは、根室市北方領土・国際交流部北方領土対策課課長の松崎誉さん、よろしくお願いいたします。

○松崎誉課長　それでは、私からは２点御説明させていただきます。資料６－１を御覧ください。
まず１点目、根室市企業立地促進条例について御説明いたします。先般、実施しました第２回の有識者会議のときにちょうど議会中でした、６月定例月議会の際に改正いたしました。
本条例は令和４年に制定されたものであります。近年の世界的なエネルギー資源価格の上昇などを背景に、建設資材や人件費が大幅に高騰しており、企業が新たに進出する際の初期投資は従来と比較して大きく増加している状況にございます。
このような状況の中、本市が企業誘致を積極的に推進していくためには、企業側の初期投資負担の軽減による環境整備を行うとともに、ほかの自治体との差別化を図りながら、誘致競争力を強化することが求められております。
先月、６月議会での改正では、企業立地の促進及び地域経済の活性化を図るため、近年の建設コストに対応しまして、助成制度の拡充、対象要件の緩和及び税制優遇措置の見直しを行ったものであります。具体的には、改正に伴いまして、固定資産税等の免税措置について、対象施設を従来の工場、情報サービス業関連施設、試験研究施設、宿泊施設、物流施設、コールセンターに新たに飲食施設を加えております。また、課税免除期間が、これまで３年間だったものを５年間に延長しております。
さらに投資額を基準とする助成につきましては、限度額が 5,000 万円から１億円へ引き上げられまして、対象事務所の雇用人数要件も５人から３人に引き下げて、中小規模の進出案件にも対応しているところです。これらの改正によりまして、多様な業態の企業進出を促して、雇用創出及び地域経済の活性化につなげてまいりたいと考えております。
次に、資料の６－２を御覧いただきたいと思います。令和７年度の「のさっぷ号」の乗車客アンケートについて御説明いたします。こちらは前回の第２回目の有識者会議におきまして、委員の先生方から、「のさっぷ号」の乗車客に関するデータについて御質問いただいておりましたので、本日説明させていただくものです。
本アンケートは令和７年５月１日から 10 月 31 日までの期間で、「のさっぷ号」の乗車客から、スマートフォンによる回答をいただいたものです。任意回答という形でありますため、全利用者 1,168 名に対して 48 名の方の回答をいただいただけで、回答率が４％ということで、アンケートとして正直どうかというところもあります。日本語のみの対応となっており、回答いただいた方の中から抽選で景品を送付している関係上、対象は日本に居住している方という形になっております。
まずお客様の属性です。世代は 50 代から 60 代が最も多い状況になります。居住地は東京都、

神奈川県の方が最も多いです。根室への来訪回数は初めての方が最も多く、目的は本土最東端であります納沙布岬への来訪と、ＪＲ花咲線の利用、次いで春国岱、車石など自然環境に関する観光が多くなっております。

交通手段につきましては、ＪＲ花咲線の利用者が最も多くなっております。宿泊につきましては日帰りが最も多いです。根室市も宿泊施設がほとんどないことが課題になっております。

平均の消費金額は、お１人様１万 5,815 円という形になっております。北方領土問題につきましては、「改めて考えるきっかけとなった」が 87.5％で最も多くなっております。

景勝地については、たくさんの根室の景勝地が網羅されており、「とても満足した」の回答が最も多くなっております。加えるべき景勝地につきましては、花咲灯台と車石が 64.6％と最も多く、次いで北方原生花園となっております。以下、個別の回答コメント・感想になっておりますが、幾つか御紹介させていただきます。「花咲線利用で釧路から来て観光でき、便利でよいと思います」「北方四島を間近に見られる貴重な場所です。日本人として必ず訪れるべき場所だと思います」「全国の修学旅行で訪れると学びになると思います」「ガイドさんの説明が丁寧で楽しく旅行ができました」という形で、おおむね肯定的な意見が寄せられております。

花咲線の接続やコースの時間配分等、課題も寄せられておりますので、今後に向けて対応を考えてまいりたいと思います。

資料の６－３につきましては参考資料となっております。

○矢ケ崎座長　どうもありがとうございました。特に「のさっぷ号」のアンケートについては、御対応いただきましてありがとうございます。回答数は少ないですが、自由意見が多く書いてあり、しっかり書いてくれる、いいお客さんが回答してくださっているという印象も抱きました。

では、今のお二方の御発表について御質問の時間としていきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○佐々木構成員　御説明ありがとうございました。遠嶋さんの御説明の中の、道東自然系施設ネットワークについて、非常に緩やかなつながりが特徴だとおっしゃっていましたが、事務局の体制も拝見し、毎年、順送りでやっているとありました。こういった組織やネットワークの在り方は、現代的で理想的だと思うのですけれども、どういうところを運営上の一番大きな問題として、加盟施設の方々は認識しているのかをお伺いしたいと思いました。

○遠嶋伸宏課長　私の聞いている限りですけれども、長いこと継続されているだけあって、ある程度、技術やテクニックがもう身についてきている方たちばっかりだったりとか、ワークショップのネタについても、そろそろ新しいネタに困っているとか、そういうところも実際のところお話は聞いています。若い職員の方たちが入ってきても、先輩たちから引き継がれているので、実は知ってるよとか、意外と勉強熱心な方たちが多いので、働きながらしっかりそこの自然、または道東の自然について学んでいる方も多いですし。

ガイドさんたちが多く立ち寄る施設ですので、ガイドさんたちからのお言葉だったりも聞いて知識になってしまうので、なかなかネットワークとしての取組内容が、ネタが尽きかけてきているっていうところは、何件か聞いたことはあります。

○佐々木構成員　この資料の５－１に 16 施設の名前が載っていますけれども、それぞれの構成員は、それぞれどういう法人格や立場でやっているのでしょうか。

○遠嶋伸宏課長　例えば羅臼ビジターセンターは環境省の施設で、町も一部委託していますが、そこに委託を受けた知床財団の職員もいます。知床世界遺産センターは、斜里町のウトロにある環境省の施設ですけれども、自然公園財団というところが管理しています。施設ごとに異なっており、例えば自治体の会計年度職員、正職員、学芸員がいらっしゃったりなど、職種や発注・委託の枠を超えた、本当に施設の運営者として集まっているということです。

○佐々木構成員　よく分かりました。ありがとうございます。

○矢ケ崎座長　ありがとうございました。楓先生、どうぞ。

○楓構成員　まず道の駅のデジタルサイネージですが、ここの道の駅はいつもお客様がたくさんいらしていて、非常に賑わっている道の駅という印象を持っています。対面の案内の補完的な役割もあるというお話でしたが、実際にどれくらい使われているのでしょうか。実はデジタルサイネージはどこの道の駅にも設置されていますが、動画が流れているのみで、実際にお客様がサイネージを触っている姿はなかなか見ることがありません。本当に便利に使ってくださっているのであれば、「こうすれば皆さんが触れてくれるんですよ」と他の道の駅にもアピールができると思います。

「のさっぷ号」のアンケートは、早速にありがとうございました。「この「のさっぷ号」はどこで知りましたか」という、「のさっぷ号」に乗るきっかけが分かる質問があると、より次の手を考えやすいと思います。また、このアンケートを見ると、ガイドが非常に重要なのがわかります。現状の「のさっぷ号」の広報資料では、充実したガイディングがあることが分かりません。今後は、このガイディングをアピールする工夫ができるといいのではないかという印象を持ちました。

○遠嶋伸宏課長　実際どのぐらい使われているかというところについては、今年の２月から稼働したばかりでして、本来の羅臼町の観光繁忙期はまだ迎えていない状況の中ですけれども、私も仕事の関係で道の駅に何度か足を運ぶ中では、特に小さいお子さんのいるような御家庭の方がサイネージを触っているのは目撃したことはありますが、まだ何とも言えないところです。サイネージを触ると観光案内を見ることができるということが、より分かるようになっていればいいというのは感じながら見ていたところです。

最初の１枚目の左側の写真ですけれども、タッチパネルは左側の画面のみで、映像については右側だけで流すというふうに役割を分担させたと設置担当者に聞きました。これから今年１年運用してみた結果を町内で評価したいと思います。

○楓構成員　防災的な役割が非常に充実しているという印象を受けました。ありがとうございます。

○松崎誉課長　「のさっぷ号」をどこで知ったかということですが、一番トップになっているのは、ＪＲの花咲線です。実は今北海道内に黄色路線という採算が合わない路線がたくさんありまして、釧路から根室に通ずるＪＲ花咲線も、車両１両で運営して、いわゆる赤字路線です。

根室市としては、そこを「地球探索鉄道」と称しまして、利用者を広げるために、御利用された方は、車中でスマートフォンを通じてイヤホンをつけると、通過した場所のアナウンスを聞くことができます。ＪＲ花咲線の到着時間は「のさっぷ号」に連動していますので、御乗車された方は、他の予定がなければ自動的に「のさっぷ号」を御利用いただけます。釧路から根室でＪＲに乗ってきて、そこから市内の観光地を回っていただけるという一体化したプログラムを構成している形になっています。

ガイドについては、「ねむろトコロジスト」という、根室における野鳥や観光地、文化、自然を勉強して、ボランティアでやられている方がたくさんいます。その方々が根室交通さんのアルバイト的な形で一緒に御乗車して、バスに乗りながら、バスガイドさんのような形で御案内するというシステムになっています。そのため、かなりコアな内容で御案内させていただけていると思います。

○楓構成員　そのガイドさんが北方領土のことに関しても、基礎的な説明をしてくださってい

るのでしょうか。

○松崎誉課長　そうですね。納沙布岬に行きましたら当然説明しますが、バスを降りますと、北方館などの施設がございますので、そこの担当職員からより詳しい説明を受けられます。納沙布岬の手前に、原生花園という、いろいろな野草や、根室は気温が低いところなので、低標高地でも高山植物がたくさん生えている部分があります。そこから納沙布岬まで大体 10 分ほどですが、その間に簡単な説明をして、納沙布岬に到着しましたら、北方館の館長さんにバトンタッチする形で御案内するなど、リンクさせて対応しています。

○矢ケ崎座長　ありがとうございます。どうぞ。

○本間構成員　ありがとうございます。先にデジタルサイネージの件ですけれども、作るのに 2,000 万円かかったということで、今後の保守点検や、内容自体の更新にあたって、どれぐらいの更新頻度なのかや、予算のめどがある程度立っているのかをお聞きしたいと思いました。
　あとは、松崎さんに、アンケートの景品を、その場で何か渡すのではなく、抽選にした理由があれば教えてください。その場で渡すと回答率が上がる可能性もあるかなと思いました。

○遠嶋伸宏課長　恐らく私たちのような小さい町が設置したものは、大体最低でも 10 年近くは使われます。もし万が一タッチパネルなどの不具合が発生すれば、もちろんそのときに修繕も出てくるかなと思います。ここはマップをメインに設置しましたけれども、大きく中身が変わることがない限りは、10 年単位で考えるのではないかと思っています。そのときの財政事情にもよりますけれども、国の補助制度とかもうまく活用しながらやっていければと思います。

○松崎誉課長　のさっぷ号の抽選の件ですが、実は抽選品が缶詰、乾物、昆布などかさばるものばかりで、お土産にお渡しするのもいいのですけれども、ほとんどが旅行で来られている方なので、これなら送ってほしいという御意見が多かったので、御住所を確認してお送りする形にしています。

○本間委員　何名ほど当選しますか。

○松崎誉課長　10 人程度です。

○本間構成員　ありがとうございます。

○矢ケ崎座長　状況がよく分かっている御説明をいただきました。ありがとうございます。
　それでは、6 人の方からすばらしいお話を伺わせていただいて、私たち構成員もまた一段と勉強させていただいたり、共感したり、今後の方向が見えたりいたしました。お時間割いていただいたことに心から御礼申し上げます。ありがとうございます。
　それでは、議事は以上となりますので、事務局に進行をお返しいたします。

○事務局　本日は長時間にわたり御議論いただきまして誠にありがとうございました。いただいた意見を踏まえて、調査研究、啓発促進策の検討を進めていきたいと思います。
　本日の議事録につきましては事務局で作成の上、発言者の方に御確認をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
　今後のスケジュールといたしましては、現段階では確定はしていませんが、10 月から 12 月の間で第 4 回有識者会議を東京で開催して、最終取りまとめ(素案)等を議題として実施する予定となっております。詳細の日程等につきましては、後日メールで御連絡させていただきますのでよろしくお願いいたします。

以上となります。

○矢ケ崎座長　ありがとうございます。
　では、以上で第３回有識者会議、これにて終了いたします。皆様、本当に本日はありがとうございました。